寿岳　潤さんを偲ぶ

古在由秀（ぐんま天文台）

2011年9月14日に亡くなった寿岳　潤さんは，1927年9月19日生まれ，京都府立一中四年終了，第三高等学校を経て，京都大学理学部宇宙物理学科を1950年3月に卒業した．

その後大学院で勉強していたが，難関であった米国フルブライト留学生試験に合格し，1953年氷川丸でアメリカに向かった．同乗者であったのが，小柴昌俊，木村資生（集団遺伝学で中立説を唱えた人）氏などであった．

アメリカでは，ミシガン大学の大学院で，L. H. Aller教授のもとで勉強し，サソリ座τ星，B型星などの恒星大気の研究に励み，1957年に博士課程を修了し，58年にPh.D.の学位を得ている．

帰国して京都大学に戻り，湯川博士のノーベル賞を記念して読売新聞社が創設した湯川記念奨学金を受け，林　忠四郎先生などと大質量星の進化などの研究を行っている．

1958年にはアメリカ・カリフォルニア工科大学の研究員となり，W. L. W. Sargentなどとともに，恒星物理の研究に従事してきた．そして，ケンタウルス座3Aに，初めてヘリウムの同位元素^{3}Heを発見している(1961)．またR. Cayrelとの共同研究で，晩期星大気の有名な論文(1963)がある．

帰国し，1963年東京天文台分光部に東京大学講師として採用され，64年に助教授に昇任した．東京天文台での初期の仕事の一つは，小田　稔さんがすだれコリメーターで概略位置を決めたX線天体はさそり座X-1を，光学的同定を岡山天体物理観測所の188 cm望遠鏡により成功したことで，その端緒を見いだしたのは寿岳さんである．

日本天文学会でも活躍の場を見いだし，1963–67年，1969–89年の24年間にわたりPASJの編集理事を務め，PASJの論文の質の向上に多大の努力をし，国際的水準に達したPASJの基礎を築いたのは寿岳さんである．筆者も同時代に編集理事をやっていたが，寿岳さんのはプロの編集者なみの仕事振りで，筆者が導入したレフリー制を実りあるものにしたのも，寿岳さんの功績である．

写真1　寿岳　潤氏

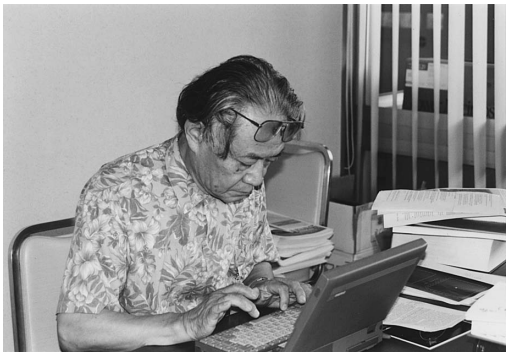

写真2　1997年IAU京都総会でLOC（実行委員）新聞編集委員としてタイプを打つ寿岳氏.

IAUでも活躍し，1979–85に「恒星スペクトル」委員会の副委員長・委員長，1982–91に地球外知的生命体などを研究の対象とするBio-astronomy委員会の組織委員を務めている．

また日本のJapan Skepticsの創立者の一人で，初代会長であった．1987年に日本で，「Star Forming region」のIAUシンポジウムがあったと

き，Proceedingの編集をしている．

1970年代からの日本の大望遠計画の議論では，海外設置の必要性を強く主張した少数派の一人である．東大教授に昇任したのは遅かったが，1988年に東京天文台を定年退職してから，東海大学文明研究所の教授を勤めていたはずである．

寿岳さんは長く病床にあり，身体は自由には動かせなくても，頭脳は常に明晰で，天文の新刊論文に常に目を通しているのには，感心していた．

生真面目で正義感が強く，東京天文台主流派の人たちと対立することが多かったが，天文学の学識は抜群で，独自な道を歩んだ寿岳さんを失ったことは，非常に残念である．

寿岳さんの思い出

近藤雅之（元東京天文台）

松島　訓さんが渡米したのは新聞で見た．寿岳さんのことは畑中先生の雑談ではじめてきいた．お顔を見たのは帰国して基研に入り年会で講演したときである．日本での学位論文をPASJに投稿されたとき図は綺麗な鉛筆書きであったので，文句を言う人がいた．畑中武夫先生が寿岳君はちゃんとしたのを送ってくるよといったが次の日にすごい立派な墨入れの図が届いた。寿岳さんが東京に移ったときはAller先生の推薦状があった．大沢清輝先生が見てご覧と渡してくれた手紙に，教えた学生で1番はChamberlain，2番はLiller，3番がJugakuと書いてあった．

寿岳さんはわたしの隣に座っていたのでいろいろな話を聞く機会があった．はなしのなかの形容詞に数値がつく．向こうから来る80%美人とか，それはπだけあやしいとかである．わたしが一番好きだったのはSargent とした3 Cen Aの^{3}Heだが実際に仕事をみていたのはCayrel–Jugakuの計算であった．タイガーをまわしてレポート用紙何冊分かを細かい字で埋めていた．

PASJの編集はそのあとだがレフリー選びも校正も，郵便の発送もやっていた．自費で2台もIBMのタイプライターを買っていた，学会は貧乏だったから．日本語のレポートは全部書き写してレフリーが誰かわからないようにしていた．よく著者と対面で文章を検討していた．息抜きに私の部屋で名前抜きで週刊ゴシップを聞かせてくれたことも多い．

岡山の公開が始まる前，京都の年会のとき斎藤澄三郎さん，上杉　明さんと4人で話したことがあった．上杉さんは公開というのに悲観的な見方だったが，寿岳さんは東京方としてそんなことはないと一所懸命話していた．思えば3人とも亡くなってしまって寂しいことである．

青木信仰さんを偲ぶ

古在由秀（ぐんま天文台）

晩年は体調が優れなかったと聞いていた青木信仰さんが，2011年10月9日に亡くなった．

青木さんは1927年8月30日生まれ，東京都立第九中学4年終了で第一高等学校に進み，1947年に東京大学理学部天文学科に入学した．この年は，天文学科の定員5名に対し40名の受験生があり，天文学科の合格者の最低点は物理学科より上であったと，天文教室主任の萩原先生は自慢しておられた．また，青木さんは，理学部受験生のなかでの最高点をとったという噂があった．

一方，在学中に病にかかり，2年遅れて1952年に卒業した．天体力学専攻で，卒業論文は「トロヤ群小惑星の運動」についてであり，1955年の日本天文学会欧文報告誌(PASJ)に出版されている．

卒業後すぐに東大理学部の助手に採用され，麻布の天文教室に勤務していた．当時の主たる研究題目は，一様でないことが明らかになってきた地球の自転に基づく時刻系に，代わり導入されてきた，太陽の動きを基にした時刻系の暦表時についてであった．

5年後に東京天文台天文計算部に配置換えになり，その直後のスプートニック1号衛星の打ち上げを契機として，人工衛星の運動にも興味をもつようになり，1961年6月から1年間，アメリカ・NASAのゴダード・スペース・フライト・センターで，臨界傾斜角をもつ人工衛星の研究に従事した．

帰国後，1963年4月に講師，66年4月に助教授，70年4月に教授に昇任している．この間，「時刻系への相対論の効果」，「地球のコア–マントル間の摩擦による黄道傾斜角の変化」などの論文を書き，天文定数系の問題について，これが主たる議題であった，IAUの関連委員会に大きな貢献をしていた．

また，大学院生を指導して，銀河の平衡形状モデルについても，多くの論文を発表し，天文定数系についても，木下宙，福島登志夫氏などとの共著の論文も多い．また，関連の海上保安庁水路部，国土地理院，緯度観測所の非常勤研究員も毎年のように兼務していた．東京天文台でも定年前の数年間，天文時部長も兼任した．

写真1　1974年ワシントン空港にて．右側は故 鰹目信三氏

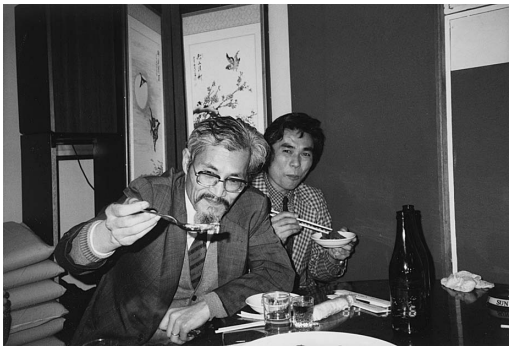

写真2　1984年　右側は中嶋浩一氏

青木さんの学識を基にして執筆し，1982年に出版された『時と暦』（東京大学出版会）は名著で，筆者もしばしば参考にさせてもらっている．日本天文学会では，庶務理事をしていた．

青木さんは独自の研究スタイルをもち，東京天文台退職後に東京大学名誉教授の称号を受けたが，その後も吉祥寺の自宅から自転車で三鷹まで通って，熱心に仕事をしていたが，病気には勝てなかったことが，残念である．